

第3部 あるべき動物看護職を模索する ～動物看護職の現状と将来～

Part 3: Exploring How Veterinary Nursing Should Be

～ The Present Situation and Future of the Veterinary Nursing Profession ～

坂田光子 坂田動物病院 動物看護職・マネージャー

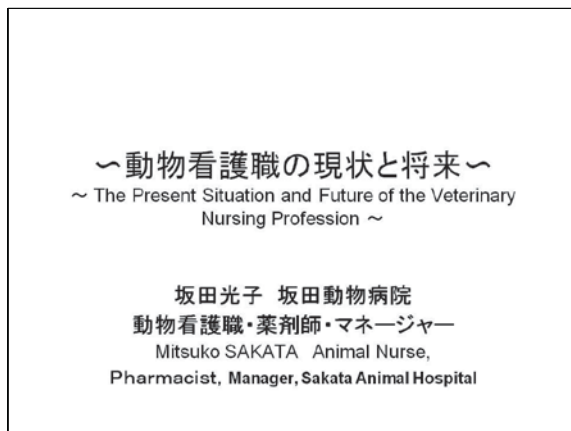
Mitsuko SAKATA Animal Nurse, Manager, Sakata Animal Hospital



よろしくお願いたします。御紹介
いただきました坂田といます。

この日本動物看護職協会、これが社
団法人としてできた、これも大変すば
らしいことだと思っております。

【スライド2】



【スライド1】



【スライド2】

その前に、私は、1995年だと思うんですが、イギリ
スで行われた国際動物看護学会というものに参加いた
しました。これは以前あった、日本動物看護師の会の代表
であった石田千晴さんが行かれるということで、私も同
行して、大変感銘を受けたのは、既に25年以上の歴史
があったということ、そしてその3日間の学会があった
ということです。動物看護学会が、それがすごいことだ、
そしてブースの数が110もありました。その中で動物
愛護団体というのかなりたくさんあって、という覚え

海外の動物看護師

- 1995年にイギリスで行われた国際動物看護学会に参加
- イギリスではすでに25年以上の歴史
- 110のブースが出る、3日間の学会
- 動物愛護団体も多く参加

- 1988年に参加した米国のウエスタン獣医師会でも看護師用プログラムは充実

【スライド3】

があります。

1988年に、このころ日本獣医畜産大学、今の日本獣
医生命科学大学の臨床病理研究室に研修に行かせていた
だいておまして、その後、UCデイビスの研修ツアー
と、その後、ウエスタン獣医師会に参加しました。その
ときにやっぱり動物看護師用のプログラムというのが
しっかりありました。残念ながらヒルトンホテルの横の
コンベンションセンターは獣医師会のプログラムで、看
護師はバスに乗って別のホテルに移動して、私も参加し
たという記憶があるんですが、随分たくさん動物看護
職の人が参加していて、そこには動物看護師向けのプロ
グラムが多くあり、獣医師向けとは違うんだと感心した
覚えがあります。【スライド3】



【スライド4】

私どもの動物病院は、新潟県の三条というところにあ
ります非常に地理的に全県どこからも気軽に移動しやす
いということで新潟県小動物臨床研究会という会がある

んですが、その会の月例の勉強会が行われるのも、細長い新潟県内のどこからも、集まりやすいということで三条が選ばれたという、そういう立地を持っているところ
です。【スライド4】

経 歴

- 1977年新潟大学農学部卒
- 1987年に日本獣医畜産大学の臨床病理学教室で研修。
- 日本小動物獣医師会の第1期の動物看護師認定
- 日本動物病院福祉協会の看護師認定
- 1998年には、地元の新潟薬科大学を卒業し、薬剤師資格取得

【スライド5】

私どもの動物病院はできて30年になります、31年でしょうか、最初は診察室一つ、待合室一つ、処置室兼手術室。そして犬舎も犬用のものが一室というような形でした。そんなような時代が昭和54年でした。その病院がだんだんに手狭になり、建て替えをしてから更に20年になるんです。今、隣の方にCT棟といって、CTを入れるために、前会計事務所だったところを検査棟にしたものを加えたりして、現在ようやく365坪に拡張しましたが、まだまだ狭い状態です。

20年ほど前に、隣の見附市で開業しておられた産業動物の先生から猫の手術を頼まれたりすることが多くなり、両方でお金を出し合って動物病院を1つつくろうということで、見附動物病院を作り、現在はそこと三条の2件の動物病院のマネージャーをしております。今、この動物病院二つ合わせまして、今、獣医師がパートの方も含めて10名、そしてグルーミングとか、私みたいなマネジメントする者も含めて35名で、2軒の動物病院を運営しております。

私の動物看護の経歴ですが、1987年に旧日本獣医畜産大学の臨床獣医学教室、現在の日本獣医生命科学大学で研修をしました。それから日本小動物獣医師会で動物看護師の認定を行ったとき、多分第1期だったと思いますが、認定を受けました。そのころは診断をしてはいけないとか、手術をしてはいけないということのほかに、男性はまだ動物看護師になれないというような規制もありました。それから日本動物病院福祉協会の動物看護師の取得、これはV Tという形で、Veterinary Technicianという名前で、認定をいただき、一番最初のときに2級をいただいたんですけれど、その後、いつもC A P Pのセミナーと重なって看護師のセミナーに出られないもの

ですから、こちらの単位が足りませんので3級でなんとか維持しているところです。

98年に地元の新潟薬科大学に編入したんです。きょうのお話はここからのお話になると思うんです。この資格を取得したということが今回のお話に少しつながるのかなということで、その辺のところを中心にお話をしようかなと思います。面接試験があったんですが、試験をされた先生に、動物病院でお薬を扱っているんで、薬について責任を持って説明をすることができるように勉強がしたいんですということでお話をしました。それは聴講生でもできるんじゃないかい、と言われましたが、聴講生では資格がないから嫌なんですということを申し上げました。私は新潟大学の農学部を出ていますが資格はありません。資格の問題は大きいとずっと思っていました。

それから獣医学部の実習生と夕食などで話していますと国家試験の話が必ず出るんですね。その国試の話がいろいろ出てくる、すごくうらやましいというのが私の実感だったんですね。農学部4年間を振り返ってみますと、私のときは単位が終わると終わりなんです。そこについて勉強し直すというのは、卒論くらいなもので、改めて見直すということはほとんどないんです。それに対して、やっぱり国家試験があると、今までやってきたことがどんなところから、どんな方向から試験が出るかわからないということで、改めて勉強する。ああ、これがいいんだなということをも夫である獣医師や勤務の先生たち、それから学生さんたちのお話を聞いて、試験に取り組む姿勢がとても大事なんだということで、強く感じました。

ちょっと自慢させていただきたいんですが、私、学生を差し置いて首席で卒業しましたし学長からも表彰していただきました。自分でも一生懸命勉強しましたが、普段、病気の動物を見ていることやクスリを扱っていることの成果であったと思います。

1999年からですが、アメリカに行って、短期間ですが、人間の病院で研修をしました。最初、私はただアメリカの病院で研修をしたいと思って話をしたら、アメリカでは薬学生が実習するにも資格が要る、ということでした。薬剤助手にも資格が必要で、先生がつかなくてはいけないのだそうです。ということで、私の恩師である先生と相談をいたしまして、実務ではなく日本とアメリカの薬剤師の業務をリサーチするということにしました。

私が行ったのは退役軍人の病院で、月2ドルでどんな医療でも受けられるというような形で、非常に恵まれた

待遇になっているんですね。でも月2ドルで提供する医療はそれなりの限度があるわけです。大体、私が行ったところは心筋梗塞とか、その辺の循環器の専門が強いところだったんですけど、この軍の病院では医者はコストが高いためらしいのですが、臨床薬剤師という制度をつくってました。臨床薬剤師というのは何をするかというと、医者に代わって患者さんとお話をして、血圧をはかったりすることもできるんですね。日本だと薬剤師というのは人の体に触れることはできないんですけど、血圧をはかって、いろいろ聞き取りをします。大体3カ月に1回しか、この診察はしません。そのときにクリスマスパーティーがあってたくさん食べたとか、その辺のところを聞いて、それからINAの検査をするというようなことを指示して、結果が出たら電話をかけるんですね、電話をかけて、血液検査の結果を聞いて、そして日本でいうワーファリンという血液を固まりにくくする製剤を。どのくらい飲むかの指示をします。その後、薬剤をメールで送ってしまいます。そういうかなり粗っぽい感じなんですけれど、そういう医者を介さない継続診療はよく行われているようでした。それだけ心筋梗塞の患者さんがアメリカでは非常に多い、そして手術をした患者さんも非常に多いということで、70歳過ぎの男性がほとんどでしたが、そういう慢性疾患への薬剤師の取り組みって非常に面白いなと思いました。

ちょうど1999年から2000年にかけて、アメリカでも薬剤師が6年制になるような時期だったんですね。そして現在はPharm. Dという、日本のPh. Dプラス薬剤師の博士を養成しています。それまで4年制だった人は、通信教育で2年分の後付をするというような仕組みが始まっていました。通信教育では宿題みたいなものが届けられて、臨床の実務を調剤薬局や病院の薬剤師の先生から指導してもらい、コメントや証明のサインをもらいながらコースを進めるそうです。2年間で臨床薬剤師というような形に持っていきますが、この形式は、4年制が6年制になる段階での対応という意味で、非常に面白いなと思います。

アメリカのその病院での薬剤師の仕事はなかなかすごくて、薬剤室に入るときは必ず暗唱番号、非常にセキュリティの厳しい、規制のあるところには上級職の人だけが別の暗唱番号を入力して中に入ります。

また、薬剤師の下に薬剤助手という人がいます。薬剤師は何をするかというと、患者さんが処方せんを持ってくると、一つお部屋に案内して、医療従事者がみんなが扱えるコンピューターのシステ

x r s U Z o M o s x \ O M O U Z ' h Z
 r z \ s ^ ; U K b q M O ^ ; w ' ^
 b { ^ ; U Z h q V t x z w > b' q T z'
 w ; w " i l h z s M Z r z
 p s z ¥ M Z ' h p z p X i ^ M q T z f O
 M l h \ q V l j ' z" w o p w O r
 s r ; Q b { f O b q N w U S m X
 p b v { a K N £ x ? b T q M O q z r M
 f w < ^ R s r x N £ U b { K q
 x 7 s T 7 p c N £ U { M b w { M w
 s ' T s M 0 t z æ o h U g ^
 o M b é o h U T ' s M q M O \
 q K Z p z p 7 x , † f U # v ' ^
 h q T z f s Ø V b Z p r x z Q
 s M Y M z • ' Æ ' x k ' 6 M p K ' ^
 h {



y § p x N w h j U z r M t H l o S
 - T b q z N £ U ' o I ' b { §
 w æ • ^ w p x +) O w - \ U M b U z
 w æ • ^ t z æ ç £ q z f w w q M
 O w U Z o X w T ' s M q a b {
 f U H w H p x z h i p < x l o \ s M p M M
 s q \ V b { K x z p § ' •
 - l o M w • ^ t' o l o M h i M
 h z f T ^ Æ G t l o z æ ç £ w
 h j w ... g w " 0 ' _ d o M h i M h ' ,
 f w ... g x O j w U M ' G p ! Z h r d ¶ w ... g q
 a O i l h q M O \ q p ' h { f T † r t
 w ' B l o M æ • ^ t l h z ^ t
 ' • - l o M f , f w • ^ t
 l h ' ' h { w t ' x £ « w '
 ^ § • » s T V ' h Z æ r z
 ç £ w h j U 7 t t O w x z M ' £ w h j q M
 O w x Z w C ' s V M Z s M ' z M { §

仕事もある、そういう中で、私たちがこの動物病院の診断とか手術以外の、ほとんど一切をやっているということでした。自分の仕事に非常に誇りを持って語っていたのが印象的でした。日本でも、動物病院は動物看護師なしではやっていけません。【スライド5】

国際ペットワールド専門学校

- ・人と動物のより良い関係づくり
～山崎恵子先生による
「人と動物の関係学」
- ・アニマルアドボケート(動物の代弁者)になるということをして全ての動物系学生の1年生に教育
- ・デルタ協会と連携してアニマルセラピーコーディネーターを養成

【スライド6】

動物病院は社会に対してどのぐらいの貢献ができるでしょうか。私どもはJ A H AのC A P P訪問活動を行っていますが、その研修会を初級、中級として、年に4～5回ずつ行っています。中級研修では国際ペットワールド専門学校にいらっしゃる山崎恵子先生とか、山口千津子先生とか、そういう方々にちょっとお時間をお借りして講義をしていただきます。初級はJ A H Aのマニュアルを読み解いていくような形で話をする部分と、訪問活動、実際、模擬的な訪問活動をしながら、自分がどのような反応するんだろうというのを見ていただく、そういう訪問活動の模擬活動という、こんな形で研修をしていますが、平成15年から最初の2年間は私がやりましたけど、今はうちの病院に勤務する男性看護師で、国際ペットワールド専門学校のアニマルセラピーコーディネーター学科を卒業し、そこの非常勤講師もしていますが、その彼に研修はすっかり任せています。

更にその彼は、以前に群馬大工学部も出ているので、我が家のC Tを、撮影自体は獣医師が行いますが、画像の三次元化などのさまざまな仕事を、もうその彼にすっかりお任せしています。ですから、これから動物看護師のあるべき姿というものを私が考えていくときに、いかに社会に対してアウトプットができていくかということを考えます。

信頼される動物看護職というものをつくっていきたくは思いますがですが、実力があって初めて笑顔だと思います。動物に温かいハートを持って接して行くだけでなく、しっかりした実力をぜひつけていってほしいなと思っています。【スライド6～12】



【スライド7】



【スライド8】



【スライド9】



【スライド10】



【スライド 11】



【スライド 12】

最後にアブストラクトの中に書いていたワーク・ライフ・バランスについてお話をしていきたいと思います。私は専門学校の顧問とか、それから学校薬剤師の仕事をしたり、薬事衛生指導員として地域のみなさんに薬の飲み方の説明会なんかをしたり、それから応急診療所で夜間の、月に1回程度なんですけど、夜間の薬剤師の業務をしながら、動物病院のマネジメントをやっています。でも、仕事以外にテニスとかスキーとか、今はマラソンなんです。この間、フルマラソンを完走しました。すごい頑張ったんです。夫婦でメタボだったのですが、仕事のやり過ぎに注意し、夜は私たちの時間にしようということで、夜、ジムに行っています。体重も減って非常にいい暮らしをしています。さらに、私が若いころにやってきたお茶、茶道というのが、これはまた今に生きてると思います。お茶の一番っておもてなしの心ですよ、熱いものは熱いように出さない、寒いときには温かいものをどうやって出すかって工夫をする、そういうことなのです。これは動物看護に絶対つながるものだと思います。生活と仕事のバランスをワーク・ライフ・バランスといいます。1人で患者様に対応しなければいけない、というような場合でも、焦っている感じを示さないでどうやって笑顔で対応できるか、これには日常のスキルアップ、技術の研さんが一番だと思うんです。どれだ

け早く準備して、どれだけ次の予測ができるか、これに限ると思います。そして技術があってハートがある、そんな動物看護ができて、なおかつ生活が充実している、そういう形が実践できるようなものを私は動物看護職のあるべき姿として提案していきたいと思っています。

御清聴ありがとうございました。

